

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

作成者：山根亜希子

○8月10日～

先週は週明けに155円台まで下落していたドル／円がじわじわと上昇してきましたが、7日に発表された米国の雇用統計が予想より悪く、再度156円台まで急落しました。

その後は値を戻し、157円台後半でマーケットは終わっています。

お盆の週ですが、荒っぽい動きが続く可能性があるため注意がいります。

今週は米国では消費者物価指数や小売売上高の発表があります。

日本と米国が明確に円安是正に動き出したことで、円安トライの動きは弱まっていますが5月介入の155円を維持しているためトレンド転換という状況にはなっていません。

過去を見ると日米の協調介入が行われた後は、必ずトレンド転換が起こっています。

前回には2011年の東日本大震災の時に円高を阻止する協調介入があり、その後、円安にトレンドが転換しました。

ただし、トレンドが転換するには1年以上の時間がかかっているため、今回も協調介入が起こってすぐにトレンドが転換すると考えるのは危険です。

円安阻止の協調介入は、1998年までさかのぼります。

97年は山一証券破綻という金融危機が起こっていた時期で、ここにアジア通貨危機などが重なり、アジア通貨が売られる動きになっていました。

98年の日米協調介入も最初は円安を止めることができませんでした。

ところが98年8月にロシアがルーブルを切り下げる「ルーブル・ショック」が起こり、米国のヘッジファンド LTCM が破綻。

米国株が暴落し、FRBが緊急利下げしたことで、ドル安円高へと流れが変わっていきました。

今回も想定外の事件が起きて、まさかの円高転換という流れになるかもしれません。

数年単位のトレンド転換が起こる時は、協調介入や歴史的イベントが起こることが多く、ファンダメンタルで見て、マネーの流れが変わってくると考えられるニュースが出てきます。

ということで、今年の後半は、いつも以上に世界のニュースに目を光らせておくことが大事です。

中東情勢に関しては、米国とイランの交渉の行方が気になります。

イランは米国とは交渉していないと言っていますが、オマーンとはホルムズ海峡の船の通行に関して協議しています。

イランは米国に対して制裁解除や攻撃による損害への補償を求めています。米国が応じるかどうかは不透明です。

再び米国がイランに攻撃するような事態になれば、株価や原油価格が急変してリスク回避的な動きが強まるかもしれません。

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

● テクニカルで見た重要ポイントは？

<ドル/円>

介入の影響で150円台後半を中心にした動きとなっています。

まずは、先週末につけた156.6円を維持できるかに注目したいです。

ここを割り込むと3日につけた安値の155.2円が重要なサポートとなります。

156円台、155円台まで下がると買いが入りやすい状況なので、大きく下がる場面があれば買いを狙ってみたいです。

急落後はじわじわと円安になる動きが続いているため、売りは中途半端な水準で仕掛けるのは危険です。週足でトレンド転換が確認できるまでは、基本は買い戦略で考えたいです。

上値は、158.6円を超えてくると160円をトライする動きになりそうですが160円手前では売り圧力も強そうなので、高値買いは避けたいです。

<気になるクロス円>

クロス円も介入の影響で高値・安値が切り下がっているペアが多く、安値更新の動きには警戒したいです。今まで強かったスイスフランの戻りが弱くなってきているのも気になります。

NZドルや南アフリカランドは週足で見てもレンジのような動きとなっています。

下値も固く高値圏での推移がしばらく続く可能性もあります。

*クロス円とは円との通貨ペアの総称：〇〇/円というような通貨ペアのことです。

<今週のファンダメンタル？>

日本では6月貿易収支などがあります。

米国では7月中古住宅販売件数、7月消費者物価指数、7月月次財政収支、7月卸売物価指数、前週分新規失業保険申請件数、7月小売売上高、8月ミシガン大学消費者信頼感指数などの発表があります。

欧州ではユーロ圏で6月鉱工業生産、4-6月期GDP(改定値)、ドイツで7月消費者物価指数などがあります。

ほかには、オーストラリアで政策金利、英国で4-6月期GDP(速報値)、6月GDPの発表などがあります。